

---

# ネギまに生まれた始祖精霊

蒼騎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギまに生まれた始祖精霊

### 【Nコード】

N0023Z

### 【作者名】

蒼騎

### 【あらすじ】

ネギまの世界に転生した主人公の話。

この作品は作者の処女作です。温かい目で見てください。感想をユーザー以外からも受けられるように変更しました。

この作品は独自設定、キャラ崩壊、原作崩壊、アンチがあります。苦手な人は見ないください。

## 第一楽章 プロローグ

「知らない空間だ・・・」

なんだこの真っ白な空間は？

はっ！まさかここは二次創作でよくでる神様のいる空間か！

いやいやおかしい・・・俺はまだ死んでないはずだ。これがテンプレ通りなら、俺が何らかの理由で死んだから転生させてあげるって展開のはずなんだがどうということだ？

それともこれはただの夢という落ちか？

「その通りじゃ。これはお主の夢の中じゃ」

神様があらわれた。

俺が振り向いてみると・・・眼に光が入って眩しい！？

そこには顔が輝いていて良く見えなかったが、良く見てみるとそこにはかなり伸ばした髭とツルツルで光り輝く頭をもった神がいた。

神様の神々しい光ってツルツル頭の反射の光だったんだなっとしみじみ思うと・・・

「お主は失礼なやつじゃな」

ん？思考が読まれてる？

まあ神様の良くある能力か・・・人の頭を覗き見る変態め！

「これこれ、神を変態扱いするんじゃない。」

「で、その変態神様が一体何の用で？それになんで俺の夢の中に入ってきた？」

「それはお主を転生させようかな〜と思ってきたのじゃ。お主の夢の中に来たのは、はっきり言って偶々じゃ。基本ランダムで誰の夢の中に入るかは俺も分からんのじゃ」

へ〜

転生か・・・面白そうだ。一度やってみたいと思ってたんだよね。魔法とかあるファンタジーなところが良いな。やっぱ男は魔法と言う浪漫がある世界に行くべきだと思うんだよね。

「ふぉ〜そうかそうか。良かったのじゃ」

「いったい何が良かったというんだ？」

「俺は暇だな。暇だから誰かで遊ぼうと思ったんじゃ。ちなみに転生させようとしたのはお主で7人目じゃ。前の6人は転生したくないと言って駄目だったんじゃ」

ふ〜ん。転生とか誰もしたことがなさそうなことを断る人が結構いるもんだな〜

なんでだろう？

「前の6人は大切な人を悲しませたくないとか好きな人と離れたくないって言って断ったのじゃ」

え・・・？普通神様の転生って周りから自分の存在を消して転生させるんじゃないのか？

それなら俺もやめy・・・

って俺にはもうそんな人いねorz

両親はもう死んでるし、好きな人は告つてもキモイの一言ですべて振られるし・・・

別にこの世界に未練なんてないかもwてか前の6人はリア充だったのか。

ん？なんか神様が泣いてるんだけど・・・

「グスツ・・・なんて可哀相な人生なんじゃ。儂からの気持ちとして今転生すると、転生先でなにかを叶えさせてやろう！」

なんて優しい神様なんだろうか！

なにを叶えさせてもらおうかな〜やっぱ転生と言ったら能力だよな。俺最強とかやってみたいしな〜・・・って待てよ。

「この転生って何の能力なしのただの人として転生させるものだったのか？」

「その通りじゃ。なんで転生するのに能力なんているんじゃ？まあ

お主は今があまりに可哀相なんで能力を1つや2つなら与えよう」

ほっ・・・良かった。

でもこれって喜んだらいいのか、泣いたらいいのかわかんね〜・・・

「笑えばいいと思うよ」

「笑えねーよ！なに真顔で言っただよ。めっちゃ傷つくわー！」

「まあ冗談は置いて、転生先で願うことはどうするのじゃ？」

「まずどこに転生するのか教えてくれないか？」

「希望どこでも良いぞ。希望がなければランダムじゃ」

「じゃ『魔法先生ネギま！』の世界で」

魔法が使いたいならやっぱネギま！の世界だよな。

リリなのでも良いけどあそこは管理局がうざそうだし・・・なにより可愛い子が少ない！

ネギま！は正義の魔法使いがうざそうだけど、原作のクラスメイトみんな可愛いらしいからな。

それにエターナルロリータという貴重な存在もいるし！

あっ・・・リリなのにもいるか・・・でもあれはなんか違うんだよな。

「お主がロリコンということがよく分かったのじゃ。あと早く決めてほしいんじゃないか？」

おっと、能力はなんにしようかな？

最強でありたいしそれになるべく長く生きたいから吸血鬼ってもありんだけど、原作みたいに吸血鬼だからって狙われるのは勘弁したい。

その条件で俺の知識の中にあるのはやっぱあれかな・・・

「俺を始祖精霊として転生させてくれ。それで『神曲奏界ポリフォニカ』の始祖精霊の能力を悪いところだけ取り除いたやつを頂戴。具体的に言つと、神曲は必要なしで絶望しても死なないようにしてくれ。」

あと羽根の設定として、羽根は基本的に六枚で本気だせば八枚に変わるようにして『神曲奏界ポリフォニカ』に出てくる八柱の始祖精霊の羽根を自由に切り換えて使えるようにして。」

「分かったのじゃ。その願いを叶えよう」

よし！これでほぼすべての属性を使える存在になれる！

「まだ他になにかお願いできる？」

「んっ・・・小さい願いなら大丈夫じゃ」

「それなら俺の生まれ変わる前の今の記憶を忘れないように保存し

てくれ。あと原作の『魔法先生ネギま!』の知識をすべて覚えてるんじゃないかって断片的に残るようにしてほしいんだけど・・・」

「そんなことなら余裕じゃ。他に能力が欲しいとか言うと思ったぞい」

「いやいや、始祖精霊の能力だけで十分だから」

「ならもう転生させるぞい」

「ちよつと待つて。原作のいつに転生させるのかまだ聞いてないんだけど・・・」

「そんなのお主の能力が決まった時にどの時代に転生させるかなんてものは既に決まったようなものじゃ。」

「え・・・?」

「まあ楽しみにしているのじゃ。今のような悲しい人生を送るんじゃないぞ」

神様がそういうと突然上空から裸の小さい天使が降りてきた・・・  
天使が・・・降りてくる・・・このシーンは!  
なるほど・・・こういう風に転生するのか。  
ならここはお決まりのセリフを言うしかないな。

「パトラッシュ・・・僕はもう疲れたよ」

そして僕はどんどん空に運ばれていった。

その途中で、あの名作のキャラは実は転生したんだなと思っている  
と意識を失った・・・

## 第一楽章 プロローグ（後書き）

始祖精霊が分からなければ「ポリフォニカ」のwikiを見てくだ  
さい

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

## 第二楽章 まさかの時代

ん・・・無事に転生できたのか・・・？  
身体を動かそうとするが動かない。  
おかしいな。身体が動かない・・・それに周りは真っ暗で何も見えないし。

あゝなるほど。始祖精霊として転生したから今は精霊として生まれる途中で身体というより存在そのものとしての状態か。この状態なら普通意識がないけど俺は転生で生まれるし記憶もあるから身体より先に自我が生まれてるのか・・・。  
意識はあるけど身体がないから周りを知覚することが出来ないってことか。

ここで精霊について少し教えよう。  
ポリフォニカの原作の精霊には2つの特殊な能力がある。

1つ、物質化という能力がある。  
これは精霊は精神エネルギーで構成されているため、そのエネルギーを使って物を作ることができる。精霊の肉体もこの物質化という能力で作っている仮初の身体である。

2つ、精霊雷を使う  
これは自身の精神エネルギーを攻撃に使って相手にぶつけるとき、そのエネルギーが何故か  
雷を纏って飛ぶので精霊雷と呼ばれている。

精霊についての解説も終わったし、暇だから寝よつと・・・

ふあゝ良く寝た・・・。さゝて身体はどうなったかな  
身体を動かそうとすると・・・動かない。  
てかまだ身体が出来てない！

暇だゝ・・・そうだ、自分の名前を考えよう。

そついえば精霊には名前が必要っていつてたような気がする。精霊  
の名前はその存在を表すと言つから偽名とか使えないし一生使う名  
前を考えなきゃ！

名前・・・名前・・・なまえ・・・

精霊の名前つて確か名・柱名・精名の3つで構成されていたはずだ  
から名前を考えるだけでめんどろだな・・・

ポク・・・ポク・・・ポク・・・チーン・・・閃いた！

俺の名前はレイチエル・フォン・オルタードにしよう！

すると突然・・・周りに光を感じた。

「はあゝやっと身体ができたか。さてさてどんな身体になったかな  
ゝ・・・って小ささ！それに裸だ！しかも下が付いていない!？」

おいおい・・・俺は女というより幼女になっちまったよ。  
それにここはどこだ・・・周りを見渡しても何も無い・・・  
まずは状況の確認が必要だな。

「え」と、俺は神様からネギまの世界に始祖精霊として転生させて  
もらって女になり今に至ると・・・」

そつだ！始祖精霊として生まれたなら羽根が出せるはず。  
それならさっそく羽根を展開してみよう。

「で・・・どうやって羽根を展開できるんだ？」

そんな風に考えていると身体の後ろが光りだし六枚の無色の透明な  
羽根が生まれ、身体が浮かび上がった。

「羽根を意識すると勝手に出るのか・・・でも羽根に色が付いてい  
ない・・・」

羽根を消して今度は紅をイメージしながら羽根を展開すると・・・  
今度は紅い羽根が展開された。

「なるほどね。イメージによって羽根が変化するのか・・・それにしても綺麗な羽根だ」

その後も紅、翠、青、紫、白、黒、銀、金の八色の羽根を順番に展開した。

ふとその時、イメージで羽根の色が変わるなら虹色のようになれるかもと思い試してみると・・・  
そこには八色の八枚羽根が展開された。

「虹色の羽根は無理だったか・・・でも一枚一色で八色の羽根が出来たから良しとするか」

あとは自分の力と容姿の確認か・・・

「とりあえず海か湖のあるところに移動するか・・・」

八色の羽根を展開したまま空に向かって飛んだ。

そして上空から海を見つけてそこに向かった。

水の澄んだ海に着いてすぐに海を覗き込んだ。

するとそこには、紅い髪で紅い眼の可愛い幼女の顔があった・・・

「おいおい、ポリフォニカの原作のコーティを幼くしたような顔し

「やないか！いや、どちらかと言うと幼いフラメルと言うべきか・・・」

今はまだ5歳のような姿だが時間が経てば大人の姿になるだろう。精霊は長い年月を生きてゆっくり成長するからどれくらいの時間がかかるか分からないけど・・・まあ可愛いから良いな。満足満足。

さうで、次は能力の確認といこうかな。

「ポリフォニカの原作での精霊の力はすべて雷のような稲妻に見えるらしいけど、このネギまの世界ではどんなふうに変更されるか楽しみだな」

海に掌を向けて・・・力を放つ。

ドォーン！！

海に巨大な水柱が出来て、身体が濡れる。

「は？」

「おいおい、なんて力だよ。」

でも、雷を纏ってなかったな。無色の何かが飛んでいったような感じだった。

たぶんあれが魔力なんだろうな・・・

「うーん、この世界の精霊は精神エネルギーを使わずに魔力を使うから精霊雷は使用できないということか。あくまでネギまにある魔力と魔法を使うことが出来るってことかな」

ってことは俺の身体は魔力で構成されているのか。

力の制御は徐々にやっていくとして、次は非物質化できるかどうか・・・

「おゝ簡単に俺の身体が消えた・・・」

しかも視界が前だけじゃなく360度すべて見渡せられる。って、オエツ！

急に全方位見れるようになると思分が悪くなってきた・・・この非物質化状態も力の制御と同様に徐々に慣れていこう。すぐに物質化して今後について考える。

「そつだ、今がいつの時代かわからないから調べよう。」

人にはばれないように慎重に空に上がって周りをよく見渡すと、一方は見渡す限り広がる大地で反対側は同じように広がる海があった。周りの気配を察知しようと感覚を広げてみるけど、何も感じない・

「あれ？近くに誰もいないのかな？」

ある不安を覚えながらさらに上空にあがり大地を見下ろしてみると、そこには大地と海しか存在していなかった・・・

「おかしい・・・建物がなにもない。人も動物も植物も見当たらない・・・まさか・・・」

俺はさつきまで、まず上空に上がって人を見つけたら聞いて確かめれば良いかと・・・安易な考えを持っていたがそれはすぐに碎かれた。

「まさか・・・今は地球の誕生した年なのか・・・」

そんな馬鹿な　！！

俺はこれからどうやって生きていけばいいんだ　！！

## 第二楽章 まさかの時代（後書き）

次は一気に時代が飛びます

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

**第三章 飢えた者たちとの出会い（前書き）**

時代が一気に飛びます

### 第三楽章 飢えた者たちとの出会い

よっ！

私の名前はレイチエル・フォン・オルタードだ。

ん・・・？私？

そう、私だ。

転生してから数日たって、ふと思ったんだ。

せつかく女になったんだから一人称を俺から私に変えようってな。なかなか慣れないけど時間ならたっぷりあるからその内慣れるだろうと思っっている。

そして今は転生してから一週間が経った。

ちなみに私はあれからずっと非物質化状態で生活している。

一週間で360度の視界なんて慣れたものだ。というかなんて便利だと思うようになった。

なんで非物質化状態で生活しているかと言うと、物質化して生活しているとお腹がすくのだから！

そして今この地球に樹と海と大地など自然だけで生物は存在していない。

精霊は物質化して生活しているとその物質化した生物の体の構造も真似るらしく、人間に物質化したら腹が減るし、眠たくもなるらしい。

だから食べられる物が生まれるまで私はずっと非物質化して生活するしかない。

そしてここからが重要なことなんだが・・・

俺の記憶からネギまの原作知識だけが全部抜け落ちている・・・

前世での自分のことや、読んだ漫画や小説の内容は覚えているんだけどネギまだけがない。神様との白い空間での会話でこの世界には魔法があるということは分かるんだがその程度の知識しかない・・・神様には断片的に残すように言ったはずなのに・・・これは神様のミスなのか？

魔法を唱えようとしても、唱えるためには物質化しないといけないから魔法はまだ使うことができない。

そして私は何もすることがなくなった・・・

もし私が絶望で死ぬ本来の精霊だったら私はすでに死んでいるかもしれない・・・

何もすることがない・・・退屈・・・

それを今から何千年と過ごす・・・何も変わらない退屈な毎日を・・・

前世でニートだった私は無気力で一日中何もしなかったり、寝てたり過ごして何もしたくねーなんて思っていたがそんなものとは全然違う。

何もしたくないじゃなくて、何もできない・・・

この時、私は退屈は人を殺すという言葉を本当の意味で理解できた。

私は食べられる物が生まれるまでこの世界を俯瞰することしか出来ない・・・  
だから・・・

私はこれからこの世界の行く末を見守っていこうと思った・・・

〜完〜

いやいや！まだ終わらないから！始まったばかりだから！！

とりあえず恐竜が生まれて繁栄するまでこの世界を俯瞰しながら生きていこう！

多分40億年ほどかかるんだろうな〜と思いつつながら意識を薄く広く拡げていった・・・

そして、自分と言う概念や時間と言う概念を感じずに、ただ世界と同化したかのように世界を俯瞰していった。

はいっ！ただいま恐竜の全盛期でございます。

ふう〜長かった。そして辛かった・・・

なにが辛いというと・・・

昆虫や恐竜の生活を見るのが辛かった・・・

ちなみになぜ辛かったかと言うと、生活と性活の両方を見なければならなかったことだ！

世界を昼夜問わず俯瞰していると嫌でもそんな生々しい光景が入ってくるんだよ！

この鬱憤は恐竜の虐待で晴らすしかないな・・・

そのためにはまず物質化するか・・・

そして物質化して大地に降り立つ

「おおく久しぶりの大地！って私はまだ幼女なのか・・・」

転生してからずっと非物質化状態だったからなく肉体は成長してないのか・・・

まあ今から恐竜時代は1億年ほどあるからそれだけ時間が経てば立派なボディに成長することだろう。これは気長に待てばいいな・・・

「腹ごしらえの前にまず私の服を作らなくては・・・このまま裸だとさすがに恥ずかしい」

そう、私は今裸なのだ。すっぱんぼんなのだ。

物質化の能力で服を作ればいいのだから簡単だろう・・・

「え〜と、紅をベースに白の模様がついたワンピースみたいなのでいいか」

ポンツ！

紅いワンピースっぽいが出てきた・・・

が、これは着れない・・・

何故かと言うと・・・出てきたのが服の構造をしてないし、どこにも頭や腕を通す穴がなくて一枚の平らな紅い板が物質化された。

「へっ？何これ？なんで板が・・・」

ポリフォニカの原作での物質化は自分の精神エネルギーを使って物質を作り出すというものだ。確か、ポリフォニカでの物質化は精霊雷の扱いが不器用だと物質化の能力もうまく使えないみたいなのを言っていた気がする・・・

つまり、この世界での物質化は魔力のコントロールが上手くなれば物質化の能力も上手く使えないってことか・・・

ならまずは魔力のコントロールから始めよう・・・あとはイメージ力の問題もあるのかもな。

そんなことを考えていると後ろから樹が倒れるような音が聞こえたので振り返ってみると・・・

「うにゃ　　！大きな怪獣　　！！！」

恐竜が涎を垂らしながらもの凄い勢いで突進してきていた。

つて、恐竜か・・・今まで上空から見てたから分からなかったけど・

・

低い視線から見ると怖すぎる！

それに良く見るとこいつはかの有名なティラノサウルスじゃないか・

・

「よしっ！最初の食料はティラノサウルス、君に決めた！」

私は裸のままティラノサウルスと向き合い、六枚の羽根を展開して

飛んだ。

ティラノサウルスが目前に迫ってきて、ティラノサウルスの飢えた視線と交錯した時、右手に意識を集中しながら振り上げ……

「エッチ ……どこ見てんのよ!!」

バツチーン!

思いつきりティラノサウルスに張り手をした。  
すると、ティラノサウルスの頬が抉れ、歯が砕け、首が折れ曲がり絶命した。

「幼女の裸を見た者には死を」

ふう食料Getだぜ!

数十億年ぶりに飯が食える。しかも肉が食える!!  
おっと、涎が……

「めっしだ めっしだ につくが食える」

歌いながら死んだティラノサウルスに近づき……あることに気が付いた……

「どうやって食べよう……調理法なんて知らないし、魔法の知識

もないから火が出せない。このまま生で食べないといけないの……

ん？そうか。

この世界にも精霊がいるから魔法を使わずに火の精霊を呼び出して使役すればいいのか。

「魔法の詠唱じゃないが思い立ったが吉日だ。」

「我レイチエル・フォン・オルタードの名を背に召喚す」

レイチエルは朗々と詠唱をはじめた。  
静かに。流れるように。

「名を問わず・柱を問わず・枝を問わず・これ数多なる精霊の女王が命なり・我が名に仕えし誉れを欲するなれば・速く馳せ参じよ……  
……フォン・柱名、オルタードの精名、レイチエルの名の下に集い頭れよ」

それは命令の句でありながら……何処か子守歌の様に柔らかく優しい響きを帯びていた。

すると……地面や空から精霊がやってきた。

一つ、二つ、三つ……数えられたのはそこまでだった。

次の瞬間、爆発的な速度で精霊が表われ周りは光に満ちていた。

おそらく、数千数万の精霊がこの場所に集まっているだろう。

『我らレイチエル・フォン・オルタードの御名にお仕えいたすを欲するものなり』

集まった精霊達が一齐に唱和した。

「ご苦労。この恐竜を料理したい。だから料理に必要な分の火を起こして欲しい」

『御意』

レイチエルの言葉に無数の精霊達が唱和で応える。

そして精霊の群れは一瞬で音もなく消えた・・・

まるでその出来ごとのすべてが幻影であったかのように

残ったのは、数柱の火の精霊と燃え盛る火だけだった。

「この世界の精霊も数千数万集めれば喋れる様になるんだ・・・  
その前に精霊の召喚も上手くいつてよかった。」

物質化能力で黒く堅い鉄板の様な謎の物質を作り、料理を開始する  
レイチエル。

「じゃじゃーん、ティラノサウルスのステーキ出来上がり」

ステーキが完成した時レイチェルの口は涎まみれだった。  
この時代には箸はなくて素手なので、このままだと熱いと思い右手  
に魔力を集めステーキを掴み食べる。

「ウマー！」

こうして、レイチェル・フォン・オルタードの波乱万丈の一日は過  
ぎていった……

### 第三楽章 飢えた者たちとの出会い（後書き）

ポリフォニカの詠唱のところは丸パクリしました。

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

**第四楽章 恐竜・・・(前書き)**

第二楽章の大自然のところを編集しました。

## 第四章 恐竜・・・

私がこの大地に降りて早くも3日たった。

一昨日は周りを散策して安全そうな山の頂上付近で木の精霊に頼んで家を立てると日が暮れてたのでその日の行動は終わった。

昨日は食べれそうな恐竜を数体狩って風の精霊に頼んで家まで運んでもらい、氷と土の精霊に頼んで恐竜をそのまま凍らせて土の中に入れて保存した。

そして今日から魔法の修業を始める。

まずは物質化能力をあげるために魔力コントロールを修業をする予定だ。

「どうやって魔力コントロールの訓練をしようかな」

前世で魔力なんて特殊なものを持ってなかったのでいまいち魔力がどういうものか分からない。今まで魔力と思っていたのはもしかして気かもしれないし。

手や脚など身体の一部を意識すればそこに筋肉とは別の何かが集まるような感覚があるけどこれが魔力なのかどうかはつきりしない。

「とりあえず羽根をだして考えよう」

まずは紅い羽根を展開してみた。

「いや〜やっぱり綺麗な羽根だ。時代が進んでパソコンが普及したらCGを称して羽根を展開した姿の画像を撮ってupしよう」

未来のコスプレ計画を思い付きながら魔力の制御方法を考えた。

「魔力のコントロールをする前に自分の魔力について把握しないといけないかも・・・それなら座禅を組んで精神統一をして自分の内にある魔力を感じるところから始めよう」

座禅を組み深呼吸をして眼を閉じる・・・

あれから一週間・・・

食ぶるときと寝るとき以外はすべて座禅を組んだが自分の内に魔力を感じることは出来なかった・・・

おかしい・・・これはいくらなんでも何かがおかしい・・・

「もしかして私には魔力を感じる事ができないのだろうか・・・」

魔力とはいわゆる精神エネルギーの別称のようなもの・・・ん？

「今何か答えに近づいたような・・・」

ポリフォニカでは精霊とは精神エネルギー体として存在していた・  
・  
この世界の精霊は精神エネルギー体ではなくて魔力で存在している・  
・  
物質化能力を使って肉体を作り出しても、作り出した物は魔力で構成されているから自分の身体はすべて魔力で構成されているということになる・・・  
身体全体が魔力で構成されてるからその中から同じ魔力を見分けるなんて出来ない・・・

「つまりこの一週間してきたことは無駄だったか・・・」

「いや、今までの座禅は精神の鍛錬と思えばいい。決して無駄なんかじゃない・・・」

「それなら何故物質化能力は不完全なんだ・・・」

物質化能力は魔力の扱いが下手だと思いつ通りに物が作れないが、存

在そのものが魔力で構成されている私はおそらく自分の意思で自由に魔力をコントロールできるはずだ・・・

「足りないのはイメージ・・・特に立体的な想像力かもしれないな・・・」

前に物質化した物は平面的で立体構造ではなかった。

ぼんやり思い浮かべるだけではきちんと再現されないのかもしれない。

「今度は立体的に、大きさ、質感、内部構造、どのような物質で出来ているかすべてをイメージして作ってみよ」

む・むむむ・・・

「・・・出来た。真っ赤な幼女用ワンピース」

このワンピースを作るのに10分以上かかった。それに精神力をこっそり持っていかけた・・・

「だが良い出来だ。触り心地も良いし軽い」

物質化能力の検証も終わったし後は魔法だな。  
原作の詠唱は覚えてないからオリジナルでいこう！

オリジナルの魔法を考えるようになってから300年が経った。  
そして今……

「ふっはっはっは、魔力を帯びていようと獣は獣。知性がなければ  
ただの雑魚に過ぎない！」

「火の精霊よ 我が名の下に集い 敵を滅する道を成せ」

『炎の道』

呪文を唱えると火の精霊が炎を纏い敵に向かって伸びる。  
敵はジャンプして避けたが炎は突然曲がり敵を追尾し、そしてぶつ  
かる。  
曲がりくねった道ができ恐竜は炎に包まれ炭化した。

「やはり恐竜のボス級といえどこの程度か」

魔法の実験で恐竜などの大型の生き物を殺し続け1000年ほど経つと、生き物たちの中に魔力を帯びて産まれる個体が現れ始めた。

魔力を帯びて産まれる個体は同じ生物の中でも特に強くなる。おそらく無意識に魔力で身体強化をしているのだろう。だが意識しているのと無意識でしているのでは精度が違う。

「下級だと傷つく程度だが中級だと一撃死とはなんて微妙な・・・」

「もう魔法については完璧だな。下級は無詠唱で出来るし中級と上級も作れた。それに切り札となる魔法も先日完成した」

この3000年は精霊を効率良く呼ぶための呪文を考えるだけで費やした。

私の使う魔法はすべて精霊を呼び出し精霊にお願いして発動するので精霊術と名付けた。

この精霊術は意外と繊細でイメージもまた重要な要素となっているので扱うのが難しい。

例えば、詠唱。詠唱を少し変えるだけで術の威力や効果が違ってくる。先ほど使った火の精霊術を例にすると、「敵を滅する」を抜かし詠唱を短くするだけで追尾性能がなくなるし威力も落ちる。逆に詠唱に「数多なる」を加えて長くすると複数の敵を狙うことが出来る。

また周囲の環境によって威力が大幅に変わる。雨だと水の精霊術が

強くなり、火の精霊術が弱くなる。他には森など木が多いところは土や木の精霊術が強くなる。このように自分の近くにいる精霊の数によって威力が変わってくるが、この場合は精霊を呼び出す部分を長くするといったもの様な威力で精霊術が使えるようになる。

最後に最も重要なのがイメージとなっっている。同じ詠唱でもイメージを変えることで術の発動が異なる。先ほどの火の精霊術を例にすると、螺旋をイメージすれば螺旋に炎の道が出来るし、直角に曲がるイメージを持てば敵を追尾するとき弧を描くのではなく直角に折れ曲がるように追尾する。イメージを強く持つと自分を中心として発動させずに相手の後ろ側から精霊術を発動することが出来るようになる。

魔法も完成させて、今生まれている恐竜の中でも最強と言えるやつも先ほど倒した。  
すると必然的にやる事がなくなる。

「する事がなくなった・・・」

体術を鍛えようにも鍛え方が分からない・・・  
もし私が人間なら筋トレという選択もあるのだが生憎私は精霊だ。  
鍛える筋肉がない。

今この世界で敵になる相手は恐竜しかいない。しかも知性がなくただ突進するだけの相手だ。それに相手は人間よりはるかに巨大で人の形をしてないから体術を学ぶのは難しいだろう。その上相手はほとんど避けられないから全力で殴る蹴るをするだけで勝てるので技術の

向上は見込めないだろう・・・

それならすることは一つしかない。

「武器を使った戦闘をするか・・・」

急遽武器を使った戦闘訓練をすることに。

とりあえず武器を作らないといけない・・・

相手は大きいから普通の大きさの武器じゃ傷を負わず事は出来ても殺すのは難しい。

それなら一撃必殺を目指した大きな野太刀を創造しよう。

想像すること5分・・・

「出来た。武器は日用品とは違い物質化するのに時間がかかるな」

今の私は服など生活に必要なものはすぐに物質化できるようになった。

例えば、服、ベッド、椅子、机、鉄板、箸、ナイフ、フォークなどなど。

「ちょうど向こうの方に獲物があるな」

野太刀を掴んで宙に浮き、野太刀を背負うと獲物に向かって飛ぶ。なぜ浮かんでから野太刀を背負うかと言うと300年経って成長した今でも私の身体はまだ120cmに届かないくらいだからだ。それに比べて野太刀の長さは180cmほどある。野太刀の背負った今の私はまさにモンスターハンター。

「ふふ・・・恐竜よ、わが太刀の錆となるがいい」

恐竜にはれないように後ろから近づき、一気に加速して一閃・・・

「鬼人斬り！」

パリーン・・・  
「なっ・・・」

さつき物質化した野太刀を斬りつけると恐竜は傷一つ負わず野太刀が砕け、光の粒子となって霧散した・・・  
そして恐竜は私の存在に気が付き咆哮した。

「ちよ・・・待った。ここは退散」

再び上空に戻り、さきほどの原因を考える。

「やはり想像で武器を作るには限度があるか・・・一から武器を作るか？いや、それはめんどろだからやめよう。武器や体術の訓練は人類が生まれ技が発達してからにしよう！」

「この時代ともお別れだな・・・」

この恐竜時代ですることがなくなったのでまた非物質化してこの世界を俯瞰して人類が生まれ文明が発達するのを待とう・・・

最後にこの時代に生きた証として隕石にも負けそうにない頑丈な岩に言葉を残そう。

奏よ 其は我らが盟約なり

其は盟約

其は威力

其は悦楽

故に奏よ 汝が魂の形を

もちろん日本語で岩に刻み海に沈める。

将来日本語が世界共通語になればいいな～と思いつながら私の体は光となって消えた・・・

## 第四章 恐竜・・・（後書き）

精霊術はネギまに出てくる魔法とほとんど一緒です。

ただ精霊の扱い方が違うと周囲の環境についての話だけ違います。また、上級以上の精霊術は主人公にしか使えません。中級ですでに使役している精霊の数が数千を超えているという設定だからです。

『炎の道』と『燃える天空』は同程度の威力です。

詠唱についても効率を良くすると原作に近くなるという解釈でしました。

主人公は原作の魔法を全く覚えていないので精霊術をオリジナルと自負しています。

野太刀が砕けた件は魔力で強化していなかったこととやはり想像では限度があるからです。（fate風に言うと主人公は剣の属性を持っていないのでどうしても本物に比べると劣るということですが）主人公は魔力を精霊の使役とほぼ無意識に近い身体強化だけにしか使用していません。魔力の属性変換など他の使い方を思いついていないのです。

作者は文才がないので修業風景と時代を一気に飛ばしました。知性のない恐竜だけの世界を書くのは難しく、恐竜相手だけで修業する描写は思いつきませんでした。すいません

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

## 第五楽章 出会い（前書き）

アンケートを取りたいと思います

主人公は吸血鬼エヴァと出会いますがエヴァをどうするかです。

? エヴァは原作通り幼女で（妹キャラのように口調は幼くなるかも）  
? エヴァを大戦期までに大人に成長させるか

感想のところにか? だけの数字を書いていただけで構いません。  
よろしく願います。

## 第五章 出会い

恐竜の時代から姿を消し幾ばくかの時間が過ぎた・・・

恐竜の時代も大きな隕石が落ちてきたことによって地球の環境が激減したことによって死滅していった。魔力を持って生き残った恐竜もいたが子供を成しても周囲の環境に子供が適応できず恐竜の繁栄の時代があっけなく終わった。

その後は霊長類が誕生したり、氷河期と温暖期を繰り返したり、長い年月をかけて霊長類がようやくヒトの形に近づき知性と呼べるものを手に入れていった。

私はその過程をぼんやりと眺めていた・・・

そして、文明と呼べるものが現れ始めると私はまた姿を物質化した・・・

私は今六枚の羽根を広げて空を飛んでいる。

今まで様々な文明を渡り色々な物を見てきた。

戦争や虐殺、奴隷、徐々に体系化してきた魔法使いたちなど長い間見てきた。

どこかで魔法という神秘を目撃した者たちは自らの持つ魔力というものに気付き、独自の魔法を使う奴が増えていった。今の時代は戦争による被害よりも私利私欲のために魔法を使う魔法使いの方が恐ろしい。戦争は事前に察知して対策をとることもできるが魔法使いたちは違う。魔法使いたちはいきなり集落を襲い好き放題やっているのだ・・・

そんな時代の中私は精霊としての力を使い、戦争で孤児になった子供を助けたり、瓦礫の下敷きになった子供を助けたり、魔法を使い暴力を振るう奴に対しては殺したりした・・・

そんなことを繰り返していると世間からは【六枚羽根の天使】と呼ばれ、魔法使いたちからは【紅の断罪者】とか【八柱の大精霊】と噂されるようになった。

「【八柱の大精霊】って言われているけど実際は私一人なんだよね」

毎回羽根の色を変えて現れるようなことをしていたら六枚の羽根をもつやつは8人いるって勘違いされたんだろう。また魔法使いたちと対峙するときは基本的に紅い羽根を展開してだから紅い髪と眼と合わさってこんな呼び名になったんだろう・・・

「はあ・・・魔法の悪用をどうにか減らさないと・・・」

「そのためにあなたの力を貸して欲しい。【八柱の大精霊】の一柱よ」

後ろから突然声をかけられ振り向くとそこにはフードを深く被った人物がいた。フードを深く被っているため顔は分からないがこいつを見ていると何故か頭がズキズキと痛む・・・

「私今忙しい。早々と帰れ」

「魔法の発展と魔法使いたちの安寧のために力を貸して欲しい」

「ふん、そんなものに興味はない」

「あなたの先ほどの言葉・・・どうにかできるかもしれませんよ？」

（こいつの言っていることは本当なのか？すこし確かめてみるか・・・）

「顔も見せない奴を信用できるか。協力してほしいなら力づくでさせてみせよ」

「わかりました」

そう言うとお互いは少し離れ・・・相手が先に呪文の詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大  
剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死  
の塵に」

「光の精霊よ 我が名のもとに集い 一条の光となり 敵を切り裂  
く剣となれ」

『燃える天空』 『光の剣』

同時に詠唱が終わり魔法が発動する。

相手が放った炎と光がぶつかり・・・炎を切り裂きフードを掠めた。

「なっ・・・!？」

「ふむ、人間にしては上出来だな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そう落ち込む出ない。話を聞いてやるから・・・お前の名前は？」

「私のことはスオとお呼びください」

フードの奴がそういうとフードを取り顔を見せた。

(女か・・・)

顔を見た瞬間・・・

頭の中に何かが流れ込んできた・・・

ライフ・メーカー  
【造物主】

- ・魔法世界を作り、始まりの魔法使いと呼ばれる
- ・造物主の掟という魔法具を持つ
- ・魔法世界の魔力枯渇により消滅するのを察知して『完全なる世界』を組織し、魔法世界の住人を助けようとするが何者かに阻まれる

(これは未来に起こることの映像・・・？そうか、原作での出来ごとか！するとこれが神様にお願ひした断片的な記憶か。今記憶が戻ったということはおそらく、原作のキャラに出会い名前を知ると記憶が戻っていくということか・・・)

「どうしました？」

「なんてめんどろな・・・」

「はい？」

「なんでもない。話を続けて」

「私はある理想を抱いています。それは魔法を自由に学び使用することが出来る、魔法使いたちだけの場所を作りたいのです。もちろん魔法を悪用すれば罰を与えます。そのような場所を作るためにどうか力を貸してください。」

「（なるほど、こういう理想を基に魔法世界をつくったのか）それはどうやって作るつもりだ？作るとなると大きすぎるといずればれるし、逆に小さすぎると意味がないぞ」

「そのあたりはまだ計画中です。ただ大きさについては認識阻害の結果というものを開発しましたのである程度の大きさは確保できます」

「（認識疎外ね・・・簡単そうに言っているが近づく人すべてに作らせるとなるとかなり難しいはずだ。よくそんな難しい魔法を作れたな。こいつは魔法の才能があるのかもしれない）私は何をすればいいのだ？手伝えるようなことはないと思うぞ」

「私は先日『契約』という魔法を開発しました。それで、できれば私とその契約を結んでいただきたいのです。これは契約することで主従の関係を作り、主を守るために従者にアーティファクトという魔法具を与えます。このアーティファクトは主の魔力が高ければ高いほど良い魔法具が出るようになっていきます。また契約した主と従者には魔力のパスが繋がり、それにより念話することができ、さらにはある一定の範囲に居る従者を自分の下に召喚することもできる優れ物です」

「それなら私が主でお前が従者で良いな？」

「はい！お願いします！」

スオは元気よく返事をする。スオの足元に魔法陣が浮かんだ。

「あ、あの・・・この陣の中で、きき…キスをすると契約が出来ます！」

「分かった」

(生涯童貞だった俺がいきなりキ、キスだと!?餅つけ餅つけ・・・って違う!落ちつくんだ俺!スオは眼をつぶっているがこのままだと動揺が悟られてしまう・・・良く見るとスオってかなりの美人だな・・・)

眼をつぶっているスオを見てさらに動揺する私。

(そんなに気負うことはない。今の私は女なんだ。これはただのスキンシップと思えばいい。ええ〜い!女は度胸!)

「いくよ・・・」

「あの、優しく・・・んっ・・・」

そう言って眼をつむり、眼をつぶっているスオに顔を近づけ・・・唇を重ねた・・・魔法陣が光り出し、2秒ほどで唇を離すと魔法陣は消えカードだけがその場に残った・・・

何も反応を示さず頬を赤らめ眼がとろんとしているスオに声をかけた。

「おい、これで完了か？」

「……………はっ！？！ごちそうさまでした！ありがとうございます！  
す！」

勢いよくお辞儀をするスオ。どうやらうまく契約が出来たようだ。

「上手くいってよかったです。なにせ初めて発動させる魔法でしたから不安があっただんです。アーティファクトカードも出だし、魔力のパスも……繋がってますノノアーティファクトカードのオリジナルは持つていてください。複製版は私が持ちますので。また今回の契約は本契約とさせていただきますました」

「そのアーティファクトカードとはどのようなものが出たのだ？」

「待つてくださいね。え〜と、主はレイチェル・フォン・アルタード。レイチェル様ですね。素敵な名前です。アーティファクトは造物主の掟という名前らしいです」

「（なるほど。この魔法具を使って魔法世界をつくるのか）早速出してみてください。もしかしたらこれからの計画に役に立つかもしれないから」

「そうですね。このカードを持ってアデアットと言つと魔法具が出てきます。逆に魔法具を消したいときはアベットと言います。行きますよ……アデアット」

魔法具を出す呪文を唱えると・・・大きな杖というより大きな鍵が出てきた。

私が見た原作の形状と同じだったのですこしほっとした。

「これは・・・物凄いアーティファクトかもしれません。これがあれば私たちの計画も上手くいくかも・・・」

「それは良かった。困ったことがあったら何でも言え、協力する。じゃあね」

さつきキスをしたことが急に恥ずかしくなり、スオの顔がまともに見れない。

おそらく顔が赤くなっているだろうからスオにはれないよう一旦逃げよう。

翠の羽根を展開して飛び去る・・・

「あ〜ん、待ってください〜レイチエル様〜」

## 第五楽章 出会い（後書き）

未来の造物主との出会いでした。

スオは主人公を姉様と慕う妹キャラでいきます。

造物主のキャラが全然違います。が気にしないでください！

次回はスオ視点の話です。

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

閑話 初めての敗北、そして（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

? 幼女のまま

? 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

1日に2つ目投稿

## 閑話 初めての敗北、そして

レイチエル様との出会いから時間は少し遡る・・・

私の名前はスオ。

あるところでは魔法の天才などと言われている。

魔法の開発、魔法の威力に詠唱速度、すべてにおいて他の人より優れている。

魔法の才能に恵まれ、その上人一倍努力をしてきたから天才と呼ばれるだけの自負もある。

だが、最近は天才と呼ばれることにうんざりしてきた・・・

それは周りの人が私の今までしてきた努力を知らずに、私のことを天才と呼び、私と競い合うことをしないからだ・・・

例えば、

初めは私を目標に頑張るとか言っていたが少し時間が経つと、「スオは天才だから簡単だよね」とか「俺もスオの様に天才だったらな」とすぐに諦め努力することをやめるようになった。

そんな中、他の魔法使いたちが話していた噂話を聞いた。それは魔法使いが悪さをすれば、【八柱の大精霊】と呼ばれる中の紅い羽根を持つ一柱【紅の断罪者】に殺されるという話だった。

私はその話を聞き、私以外の魔法使いでそんな簡単に他の魔法使いたちを殺す事が出来るのだろうかと少し興味が湧いた。

【八柱の大精霊】・・・それは魔法使いの間では人の姿をしているが精霊の主で長い時を生きていて六枚の羽根を持ち、羽根の色が違う八柱の精霊が存在していると言われている。他には人の姿をしているのだから、ただの魔法使いで魔力を使って八色の羽根を使い分けてだしているに過ぎないと主張する輩もいる。

このように色々な主張があり謎の多い存在なのである・・・

その噂話を聞いて数日たったある日・・・

私は魔法の研究に一段落が付いてぶらぶら休憩していると、【八柱の大精霊】の目撃情報を聞きチャンスと思いき空を飛んで急ぎそこに向かっている。

私のある計画のために・・・

目的の大精霊を探す事30分・・・

ようやく翠の六枚羽根を広げている存在を見つけることが出来た。

・・・が、羽根を広げているのはまだ150cm程の少女だった・・・

なんて凜々しい姿・・・

(大精霊と言われる存在がまさかこんな凜々しい方だったなんて・・・それにものすごい魔力を持っているけど見た目は人間の女性と大差ない。羽根がなければただの人間だと見逃してしまいそうなほど・・・)

初めて噂の存在を見つけた私は羽根を持つ少女の姿に胸が高鳴った。初めは驚いていたがすぐに我に返り【八柱の大精霊】の二柱といわ

れる少女に声をかけようとした時、少女の独り言が聞こえた・・・

「はぁ・・・魔法の悪用をどうにか減らさないと・・・」

（喋った！？しかも独り言？やっぱり人間だったの・・・？）

それに私と同じことを考えている・・・

私も魔法が悪用されるようになってからはどうやってその悪用を減らそうか考えていた。

そして私の出した答えは、魔法使いたちを一か所にまとめ魔法を自由に使えるがきちんと言理する場所を作るというものだ。

この人だったら私の計画に賛同してくれると思いい声をかけた。

「そのためにあなたの力を貸して欲しい。【八柱の大精霊】の一柱よ」

なるべく高圧的にならないよう気を付けていうが・・・

「私今忙しい。早々と帰れ」

「魔法の発展と魔法使いたちの安寧のために力を貸して欲しい」

「ふん、そんなものに興味はない」

「あなたの先ほどの言葉・・・どうにかできるかもしれませんか？」

「顔も見せない奴を信用できるか。協力してほしいなら力づくでさせてみせよ」

「わかりました。(あ……フード被ったままだった)」

そう言うとお互いは少し離れ……先手必勝と思い私が先に呪文の詠唱を始めた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に」

「光の精霊よ 我が名のもとに集い 一条の光となり 敵を切り裂く剣となれ」

『燃える天空』 『光の剣』  
フォトンセイバー

同時に詠唱が終わり魔法が発動する。

私が放った炎と光がぶつかり……炎が切り裂かれフードを掠めた。

「なっ……!?!」

私の最大呪文があっさり破られる。

それも私の最大呪文より圧倒的に短い呪文で……

(すごい・・・呪文は短い割りに詠唱速度は遅いが、それは遅いと  
いうより流れるようにゆったりと誰かに囁きかける様な優しい感じ  
・・・)

「ふむ、人間にしては上出来だな。」

(この人に着いていけば何か分かるかも・・・それに私以上の魔法  
を使える人なんて初めて・・・)

「そう落ち込む出ない。話を聞いてやるから・・・お前の名前は？」

「私のことはスオとお呼びください。」

私は名前を言い、取り忘れていたフードを外す。  
すると美しい顔が一瞬、歪んだように見えた。

「どうしました？(まさか私の顔がそんなに変！？)」

内心動揺しながら尋ねる。

「なんてめんどろな・・・」

「はい？」

「なんでもない。話を続けて」

(気になる・・・そりゃ眼の前にいる美しい姿に凜々しい顔をもつ

人に比べたら私なんて平凡な部類に入るんだろうけどさ・・・でも、まずは私の話をしないと)

「私はある理想を抱いています。それは魔法を自由に学び使用することが出来る、魔法使いたちだけの場所を作りたいのです。もちろん魔法を悪用すれば罰を与えます。そのような場所を作るためにどうか力を貸してください。」

「それはどうやって作るつもりだ？作るとなると大きすぎるといずればれるし、逆に小さすぎると意味がないぞ」

「そのあたりはまだ計画中です。ただ大きさについては認識阻害の結界というものを開発しましたのである程度の大きさは確保できます」

「私は何をすればいいのだ？手伝えるようなことはないと思うぞ」

「私は先日『契約』という魔法を開発しました。それで、できれば私とその契約を結んでいただきたいのです。これは契約することで主従の関係を作り、主を守るために従者にアーティファクトという魔法具を与えます。このアーティファクトは主の魔力が高ければ高いほど良い魔法具が出るようになっていきます。また契約した主と従者には魔力のパスが繋がりがり、それにより念話することができ、さらにはある一定の範囲に居る従者を自分の下に召喚することもできる優れ物です」

「それなら私が主でお前が従者で良いな？」

「はい！お願いしますー！」

私はつい嬉しくなり勢いよく返事をして魔法陣を描いた。

「あ、あの・・・この陣の中で、きき…キスをすると契約が出来ます!」

(あゝ緊張します・・・初めてのキスがこんな綺麗な人なんて。それに私からキスをせがむなんて、なんてはしたないことを・・・)

「分かった」

(え!?! 即答? まさかこの人は経験豊富なのかな・・・? それなら眼をつむって待っていきましょう)

「あの、優しく・・・んっ・・・」

(な、なんて柔らかい・・・それにキスってなにか満たされる気がします)

「おい、これで完了か?」

キスの余韻に浸っていると突然声をかけられた。

「……………はっ!?! ごちそうさまでした! ありがとう! げいます!」

その後は契約について話をし、手に入れたアーティファクトを出  
現させた。

（これが私とレイチエル様との愛の結晶・・・感じる魔力が凄いで  
す）

私がアーティファクトに夢中になっていると突然レイチエル様がど  
こかに飛んでいった・・・

「あ〜ん、待つてください〜レイチエル様〜」

こうして2人での旅が始まったのであった・・・

（絶対に逃がしません！どこまでも追いかけていきます！！）

## 閑話 初めての敗北、そして（後書き）

次話から更新が遅くなるかもしれません。

週1の更新を目指して頑張ります！

ああネタが欲しい・・・特に魔法世界創造からエヴァに会うまでの  
・  
・

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。  
できればアンケートに答えて行ってね。

## 第六章 私たちの計画（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

？ 幼女のまま

？ 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

現在

？ 一票

？ 七表

前話からかなり時間が空きました・・・すみません

## 第六楽章 私たちの計画

（スオside）

お姉さま（レイチエル）と旅を始めて1年と少し経った頃・・・

お姉さまからの契約で手に入れたアーティファクトのおかげで計画は順調に進んでいる。

つい先ほどこの1年の結晶である転移魔法の開発に成功したところだ。

転移魔法とは壁など障害に関係なく物体を瞬時に移動させる魔法で、今の魔法の知識では実現不可能とされてきたが私のアーティファクト『造物主の掟』の能力のうちの1つであるリロケットという転移能力を解析して作ることが出来た。

この転移魔法を見たお姉さまは今まで考えたこともないようなことを言ってきた・・・

「地球に魔法使いの国を作るをやめて、どこか別の場所・・・例えば火星とかに造るのはどうだろうか？」

私はこの言葉に無理だと思った・・・

私の開発した転移魔法は複雑に出来ている分魔力の消費が激しく、

長距離転移することする難しいのだ。それを地球の外にある火星まで転移するとすると魔力が圧倒的に足りない。そのことをお姉さまに伝えると・・・

「この地球には霊地と呼ばれる高濃度の魔力が湧き出る場所が無数にある。大気にある魔力とは地球という1つの生命が作り出すエネルギーで霊地はそのエネルギーを放出する場所だ。大きな霊地の魔力を使い火星まで転移するなら魔力など余裕で足りる。だがまあ同じ場所で転移魔法を連続使用して霊地の魔力が枯渇すると魔力を放出する口が閉じて霊地じゃなくなりただの土地になるけどね・・・」

「そんな場所があるんですね・・・でも火星は人が住めるような環境なのですか？」

「火星に人が住むのは難しいだろう。海がなくほとんど水がないし、空気も薄い。なにより魔力が僅かしか存在することが出来ない。火星と言う生命が作る魔力は地球と比べると微々たるもので霊地も小さいから大気に広がる魔力は少なく、広がった魔力もすぐに消滅する」

「お姉さまは火星について詳しいですね。意外です・・・」

「なに、一度火星に行ったことがあるんだよ。私は精霊だから酸素なんて必要ないし暇だったから旅に出たんだよ。まあ一度行って帰るまでに魔力不足で死にそうになったが・・・」

「それで人の住めない火星にどうやって魔法使いの国を造るといふんです？」

「それはね・・・火星の少ない魔力を使って、火星の大地を触媒として大地を覆う様に人が住めるような幻想空間を造り、さらにその幻想空間全体に外から位相をずらす魔法をかけて地球からは元の火星のままに見えるようにすることで、魔法使いだけの世界の誕生だ」

「・・・凄いい。それなら上手くいきますよ。早く・・・一刻も早く魔法世界を作るための準備をしましょう！」

さすがお姉さま！このようなこと私だけでは思いつきませんでしたし、思いついたとしても方法が分からず断念していたでしょう。これでようやく私の夢が叶う・・・

「まあ待て」

私が喜んではいやいととお姉さまが私に声をかけてきた。声が少し暗く聞こえたのでお姉さまの顔を見上げると真剣な表情をしていた。

「火星に魔法世界を造るのには重要な欠点がある。まず1つ目、火星が作り出せる魔力が魔法世界の創造と維持、位相をずらす魔法の維持に必要な魔力に届かないかもしれないこと。2つ目、もし幻想空間を作り出せてもその中に魔力は一切ないから溜まるまで時間がかかること。3つ目、国とは違い世界を造るのだから造った後がかなり大変になること。4つ目、地球外に魔法世界を造れるのは『造物主の掟』を持つお前だけ。最後に、幻想空間はいつか必ず崩壊すること・・・」

さっきまでの笑顔が最後の欠点を聞いた瞬間に顔色を変えていった。  
・  
・

「どうして……どうしてそんな崩壊するなんてわかるんですか……」

「必然だ……今の火星は徐々に生命の活動を弱めて行っている。だから魔力の生成する量が減少しいつか幻想空間を維持できなくなる。すると幻想空間がなくなり人の住めない火星に人間が放り出されることになる。」

「そんな……火星に放り出されたらその人たちが死んじゃう……そんなことが分かっている世界なんて私には造れない……」

お姉さまは私にいつかたくさんの人を殺すだろう世界を作れと言うの……  
間接的とはいえ私が原因でたくさんの人が死ぬ……考えるだけで身体が冷えてく……

「そんなに震えるな……崩壊すると言っても一度幻想空間を創造してしまえば数千年は確実に持つ。魔法世界内で何も起こらず平和だったら数万年、あるいは数十万年は持つだろう。それに時代が進み、技術が進歩すれば火星に人が住めるようになるかもしれない」

「……でも……それは可能性の話なのでしょう……もし……」

火星に人が住めないまま幻想空間が崩壊すると考えると・・・」

怖い・・・こわいよ・・・

そんな危険があるなら魔法が人にばれたり、魔法使いが住める場所が小さくてもいいから安全な地球内に造った方が・・・

そんなことを思っていると涙がこぼれ出し、突然なにかが身体を包みこんだ・・・

お姉さまが震える私を安心させるように抱きしめてくれたようだ・・・

「泣くな、スオ。人間を信じる。人間は凄い・・・もし幻想空間が崩壊しそうになっても誰かが気づき何とかしてくれる」

私は声を抑え、強く抱きつきお姉さまの胸を借りて泣いた・・・  
そして泣きながら意識が薄れていった・・・

〈レイチエルside〉

ふう・・・寝ちゃったか

「それにしてもまさか泣くとは思わなかった」

これで私が映像として見たような魔法世界が造られるだろうか・・・

もしかしたら私の介入で別のものが出来るかもしれない。でも私がいなければ『造物主の掟』をスオが手に入れることが出来ず魔法世界なんてものは造れなかつたはず・・・

いや・・・そもそも私がない原作でも造物主は『造物主の掟』を持っていた。

それに私のいない原作で造物主が持っていた『造物主の掟』と今スオが持っている『造物主の掟』は形状が同じだけで能力が違うかもしれない・・・

あれ・・・頭がこんがらがってきた。このことは考えるのをやめよう・・・

そういえば原作知識によるとスオが造物主らしいけど、魔法世界を造ってそれが崩壊寸前になるまでどうやってスオは生きていたんだろ？スオってまさか人間じゃないとか？？

分からない・・・まあなるようになるか・・・

## 第六楽章 私たちの計画（後書き）

難しい・・・文章を書くのが難しい

自分の頭の中を上手く文章化できないし、

文字数を増やそうと思ってもなかなか増えてくれない・・・

とりあえず今後の展開が早く考えないと・・・

ネタとか出してくれれば、《もしかすると》採用するかも・・・

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。  
できればアンケートに答えて行ってね。

## 第七章 迷い（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

？ 幼女のまま

？ 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

現在

？ 二票

？ 七表

## 第七章 迷い

「スオside」

眩しい・・・

眼を開けると太陽の光が私を照りつけていた。  
私はいつの間にか寝ていたようだ・・・

「ここは・・・」

「ようやく目が覚めたか。気分はどうだ？」

そうだ・・・私はお姉さまから火星に魔法世界を造るという話を聞いて途中までは盛り上がりすぎていたが、その後ある話を聞いたら涙が出て・・・  
あれ・・・思い出すだけで身体が・・・

「スオ・・・落ちつけ。そんなに怖いならもう火星に魔法世界を造るという話は忘れる。私が無神経すぎたんだ。すまなかった・・・」

お姉さまが私に謝ってくる・・・でもお姉さまは悪くない・・・  
この1年一緒に旅をしてきたからそのことが良く分かる。  
いつもは私から話し掛け会話を繋いでいくが、お姉さまから私に声をかけてくれることはほとんどない・・・

そんなお姉さまから私に声をかけてくれる時はいつも何らかの意味があつた・・・

今回もおそらく私が知らないだけでこんな話をするには理由があるはずだ。

「いえ・・・火星の話をしたのは意味があつてのことでしょう？できればお姉さまの考えを私に教えてください」

「意味か・・・私はただこの地球以外にも造る場所はあるということと言いたかつたんだ」

「ですが地球以外に造るといわずれ幻想空間を維持できなくなるのでしょうか？それなら地球に造つた方がいいじゃありませんか・・・」

「別に維持できなくなるのは絶対ではない。ただ地球ほど魔力が豊かな場所はなく、火星の場合はいずれ魔力が枯渇するだけだ。私の知る限り他に候補がないが・・・」

「それなら火星に幻想空間を造るのではなく地球の大地を触媒として幻想空間を造りその空間の位相をずらせばいいではないですか？」

「そうですよ・・・わざわざ火星まで行って位相をずらした幻想空間を造らなないで、魔力が豊富にある地球に魔法世界を造ればいいんですよ・・・」

「そうすればいずれ崩壊するなんて心配をしなくて済む・・・」

「これは私の推測なんだがな・・・もしこの大地を触媒として幻想

空間を造って現実世界と隔絶したとしても、多少なりともお互いに干渉するはずだ……」

「お互いに干渉ですか……それはいったいどんな風に？」

「例えば、幻想空間で私が魔法で巨大なクレーターを作ったとすると現実世界ではクレーターが出来た場所に地震や地割れ、地盤沈下などが起きると考えられる。小さいことを言うと、現実世界で台風などで大雨が降ったら幻想空間ではその場所で予報とは関係なく雨が降ったりするはずだ」

「なるほど……だからお姉さまはこの1年間幻想空間を造ることで魔法使いの住める場所を造ろうなんてことを言わなかったんですね……」

今思えばそうだ……

地球に幻想空間を造ることに何のデメリットもなければお姉さまはもっと早く提案してくれたはずだ。

もし私が移動に便利だと思って開発した転移魔法がなければ、お姉さまは幻想空間の話をしなかっただろう……

「他にもあるぞ。もし魔法の抵抗力が高い人間がいたとしたらいずれ幻想空間に迷い込むかもしれない……俗に言う神隠しだな」

「神隠しですか……私が噂で聞く神隠しは大抵が魔法使いによって引き起こされるものですね。魔法使いが原因ではなく重なり合う幻想空間のせいで日常的に起きるといいますか？」

「これも可能性の話だ。起きるかもしれないし、起きないかもしれない……」

「幻想空間を造るとしたら地球と火星のどちらにもデメリットがあるという事ですね……」

それなら今まで通り魔法使いの国を目指せばどうだろうか……ただ幻想空間を使って魔法使いが気兼ねなく住める世界が造れなくなっただけで、今まで通り魔法使いが集まって住む国を造る方針で行けば良いのではないのだろうか？

「お姉さま、私は今幻想空間を諦め地球に小さいながらも魔法使いが集まって住む国を造る方向で行こうと考えています。ですが1つ気になっていることがあります。これを聞くまで明確に答えが出せません」

「ほお……何が気になっているんだ？」

「私はお姉さまが火星というより、地球外のどこかに魔法使いの住む場所を造ることに拘っているかのように感じます。なぜそこまで地球の外に拘るのですか？地球内じゃだめなんですか？」

昨日今日のお姉さまの話している姿を見ると地球外に造りたいと思っっているはずだ。

それにお姉さまはまだ私に重要な理由を隠している。なんとなくそんな気がする……

「はあく・・・そうだよ、私はどうしても魔法使いの住む場所を地球外に造りたい。私はな・・・今まで言わなかったが魔法使いは地球に居るべきじゃないと思っている・・・」

「なっ！何故ですか！魔法使いは治癒の魔法を使ったりして、助けられないような人を助けたりしているじゃないですか」

「この1年私に着いてきて君はいつたい何を見てきたんだ？確かに治癒の魔法は素晴らしいよ・・・でも魔法と言う力がなければ傷つかなかつた人も大勢いるんだ」

・・・そうだった、暴力や殺人で傷つく人が日常的に出ているが、それに魔法が加わってくるとその規模が違ってくる・・・私が悪い魔法使いを懲らしめるときに使う『雷の暴風』も防御魔法も使えない一般人が喰らえば、一発で数十人は肉片に変わるだろう・・・

「人間は魔法なんてものに出会わなければ良かったとすら私は思っている・・・人間は未知の力に魅入られてしまうものだ。地球上に魔法使いの国を造り認識阻害の魔法をかけても、人との交流は避けられないだろう。だから魔法使いが人となるべく接触しないようにするために私は地球外に造るのはどうかと言っただんだ・・・」

確かにお姉さまの言うとおりだ・・・

地球上に造る限り食料の確保などで交流する必要があり、認識阻害をかけて魔法使いとすぐにばれなくても時間が経てば気付かれるか

もしれない・・・

私はいったいどうすれば・・・

レイチエル side

そう・・・人間に魔法なんて過ぎた力なのだ・・・

この世界が前世で見た漫画の世界で魔法が重要な位置にあるつてのは神様との会話からなんとなく推測できるから魔法が広まるのを楽しみにしていたが、実際に体験すると楽しみなんて感情を抱くことが間違いだったと思う様になった・・・

初めは偶然魔法が使えるようになったからか全然威力もなく使い物にならなかつたが長い時間が経ち魔法の研究が進みだすと、人に試し打ちをしたり暴力を振るうのに魔法を使うなど悲惨なものだった・・・

もし私が魔法をたまたま使えるようになったやつを見つけて、そんなやつらを片っ端から殺していけば魔法と言う存在が広がらず前世の様な世界になったはずだ。

前世の世界では魔法なんてなくても楽しく生きていた人がたくさんいた・・・

「スオ・・・火星に魔法世界を造ってくれ」

私が酷いことを言っているのは分かっている。  
でも魔法を知らず幸せに過ごしている一般人をこれ以上魔法で傷つ  
けさせたくないんだ。

「少し・・・一人で考えさせて下さい・・・」

「分かった・・・答えが出たら念話で教えてくれ」

私は浮かび上がりスオから離れていった・・・

## 第七章 迷い（後書き）

話がなかなか進まない

次話で魔法世界が完成すると良いな・・・

いつになったらエヴァが出せるのやら

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。  
できればアンケートに答えてくれると嬉しいです

## 第八章 倉庫（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

？ 幼女のまま

？ 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

現在

？ 四票

？ 七票

## 第八楽章 倉庫

はあくちよつとスオには言いすぎたかな・・・  
スオが自分の考えをまとめて結論を出すのに数日かかるだろうから  
その間することがなく暇だし大きな霊地でも確かめに行きますか。

「ここからだ・・・結構遠いところにあるな。この距離なら久しぶりに非物質化して移動しますか・・・ん？」

スオと旅をするようになってからは、2人で旅をするのに1人が見えない状態になったらつまらないだろうと思ひ私は一度も非物質化状態になっていない。

なのでスオは私が世界に溶け込むように消えることが出来ることを知らない。

そして久しぶりに非物質化したら私の足元に何かが落ちた。

めんどくさいと思ひながらも物質化して落ちたものを拾ってみるとそれは何かのカードだった。

「落ちたのは私とスオの契約カードか・・・何故落ちた？」

私は不思議そうに思ひながらもカードを持ったまま非物質化した・・・

するとまた契約カードが地面に落ちた・・・

「そっか・・・このカードは私の魔力で物質化している訳じゃないから物質化を解くことが出来ないんだった。」

このカード私にとって持ち運びが不便だな

さすがに捨てたりしたらスオが悲しむだろうしどうしようかな・・・

「うん・・・・・・私が創り出した物じゃないのを入れる倉庫を創るか。」

どうしようかな・・・そうだ。

影に物を入れることが出来るようになる精霊魔法を創ってみよう。

詠唱は即興で作ってと・・・

「影の精霊よ 我が名のもとに集い 無限に広がる 空間となれ」

『影の倉庫』

呪文を唱えると影の精霊だろう黒い物体が集まり小さな丸い球体を成していたが・・・

精霊が集まってくると徐々に球体が、 10・・・50・・・100  
とどんどん大きくなり

私の身長を超え見上げないといけなくなっても大きくなっていく・・・

「ストップ！こんなに集まらなくてもいいから。解散解散！集まってくれてありがとう」

「ふゝ危なかった。私の精霊魔法は攻撃や防御は強いけど、日常で使う魔法には向いてないんだよな・・・転移や認識阻害など便利な魔法はすべてスオの魔法を教えてもらってるからな」

おそらく呪文の詠唱を間違えたからあんなに広がったんだろう・・・それなら詠唱を変えて何回もチャレンジすればいつか良いのが出来るか。

「影の精霊よ 我が名のもとに集い 倉庫となる 小さな穴となれ」

詠唱を唱えると目の前に手のひらサイズの小さな黒い球体が出来ていた。

それを見て私は石を拾い黒い球体に投げつけみた。

すると石は吸い込まれるように消えたが、取りだそうと思いき手を突っ込んでみると空っぽでなにもなかった・・・

「失敗か。よしっ次・・・」

「影の精霊よ 我が名のもとに集い 物を保管せよ」

石は入ったが今度は私の手が弾かれた・・・おそらく生物は入らない仕組みなのだろう。

「また失敗か・・・どんな詠唱が相応しいんだ？」

あれからたくさん呪文を唱えたが全く成功しなかった・・・

やっぱり便利なものほど呪文は考えるのが面倒だ。

「私から成る影の精霊さんお願いだから私の荷物を預かって」

私が自分の影を見ながら呪文と言うよりただの言葉を発すると地面から黒い手のような物体が伸びて、手に持っている契約カードを掴んで影の中に消えて行った・・・

「何今の・・・あっ！？私のカード・・・」

突然のことで何も反応が出来なかった・・・  
しばらく茫然として、そして契約カードをとられたことに気づいた

私は慌てて言った。

「ちょ、ちょっと・・・影さん、それ大事なものだから返して」

すると、どういふことだろうか・・・

私の影から手の様なものが伸びてきて、その手には契約カードが握られていた。

「あ、ありがとう・・・」

あれ・・・さっきので『影の倉庫』が完成しちゃったかな・・・私が今起きていることについて思考していると、カードを持った手がお辞儀をするように曲がった・・・もしかして私の思考に反応してるのか？

また手が曲がった・・・

(私の考えてることが分かる?)

手が縦に曲がる。

(話す事が出来る?)

手が横に振られる。

(あなたには倉庫として自由に取り出せる能力がある?)

手が曲がる。

(あなたは自我がある?)

手が曲がる。

驚いた・・・まさかこんな変なものが出るなんて・・・

「痛っ!?!」

自分の影に殴られたようだ・・・しかも影の手が胸を張っているように見える。

私の影のくせになんて偉そうなんだ・・・

とりあえず影の手からカードを受け取り、影の手を元に戻させる。

「便利なのか、不便なのか微妙なものだな・・・それにしても魔法とは摩訶不思議なものだ」

(影さん、もう一度このカード預かって)

私は受け取ったカードをポケットに入れて、影にお願いするとポケットからカードがなくなっただ・・・

なるほど・・・私から出来る影ならどこからでも収納できるのか。

「ふう〜大きな霊地を回ってみますか」

気を取り直して、当初の予定だった霊地巡りを開始するレイチエルだった。

レイチエルの輪郭がぼやけ身体の境界が曖昧になり、身体が非物質化状態になるとそこには綺麗な夕陽が見えた。つまり半日近く呪文を唱えていたようだ・・・

## 第八章 倉庫（後書き）

次回は世界樹がです。

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。  
できればアンケートに答えてくれると嬉しいです

## 第九楽章 大きな樹（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

？ 幼女のまま

？ 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

現在

？ 十一票

？ 十一票

？と？を行ったり来たりするのは無効票とします。

たとえば普段は幼女ですが魔力供給を受けると大人になるとかは出来ません。

また原作期に入る前に封印されたとしても容姿は大戦期と変わりません。

第四楽章と第五楽章でレイチエルの魔法で片仮名の読み方を書いてましたが、不要だと気付き消しました。

## 第九章 大きな樹

大気中の魔力が濃いと精霊がたくさん集まり、精霊魔法の効果は上昇する。

また精霊が密集しているところを感知できれば、そこが霊地という訳で簡単に発見できるから探すのが楽だ。

（おゝ、さすがに大きな霊地だけあつて大気中の魔力濃度が濃いな。）

私は非物質化状態で世界中を飛びながら大きな霊地を見て回っている。

特に大きな霊地は私が見ただけで世界中には7つ存在している。

そのうちの6つをさっきまで見て回っていて、今は最後の7つ目の霊地に向かっている途中だ。

空から見下ろすと人々が朝日を浴びながら懸命に働いているのが見える。

この地の人は木を組み立て住む場所を作ったり、畑を耕して生活しているようで私にはとても懐かしく見えた。顔立ちも日本人っぽいしおそろくだがここは昔の日本だろう・・・

しばらく飛んでいると広大な森が見えてきた。

（昔の日本にはこんなにも大きな森があったのかな？）

前世の日本では見たことがないような大きな森がそこにはあった・  
森全体を観察していると森の中心に特に巨大な木があることに気づきそこに飛んだ。

( 凄いな・・・この場所は木の力だけで大きな霊地になっているよ  
うだ )

この地球にある霊地の中で小さい霊地は木のあるところが多い。  
おそらく木が大地から栄養と同時に魔力を吸収して、酸素と同時に放出するから擬似的な魔力放出口となっているから霊地になっているのだろう。

森の中心に着くとまず驚くのが木の大きさだ・・・  
見上げて頂点が見えず、もし前世にこれがあれば間違いなくギネスに載っているだろう大きさだ。あまりの大きさに私は物質化して木に触れてみた・・・

「これだけ大きな木だったら触れるだけで感動を覚えるな」

「・・・何奴！？まさかこの木を狙いに来たものか？」

私が木に触れて大きさを感じていると突然男達が声をあげて走ってきた・・・

「えっ！？いや・・・私は別に怪しいものじゃ・・・」

「その人間ではありえない紅い髪、紅い瞳・・・そなた物の怪の類いだな？行くぞ！」

「「オン キリ キリ 出でよ」「」

『善鬼、護鬼』

走ってきた三人が一斉に呪文を唱え、六体の鬼が現れた。これは俗にいう陰陽術とい奴だろうか・・・

「なんだあ、久しぶりに呼ばれたと思ったら相手はナイスバディな姉ちゃんかいな」

「我らの御神木を狙う不屈きものだ。やれ」

前世でも有名なあの陰陽術を見れたことによる感動に浸っていると、三体の鬼が金棒を振るってきたが常時展開している障壁で防ぎ、とりあえず神木というやつから離れた・・・

「なんやこの姉ちゃん、魔法使いやったんか」

「そんなの関係ない。今度は同時に行くぞ」

術者達は一斉に懐から木の板を取り出し呪文を唱え、鬼達はこちらに攻撃をしてきた。

『『『急急如律令 風の刃よ』』』

私はカマイタチを全て避け、金棒を障壁で防いだところで話を聞いてもらうために反撃にでた・・・

「とりあえず話を聞いて！」

「木の精霊よ 敵を捕らえよ」

『樹縛』

「な、なんだこれは!？」

私が詠唱すると、術者や鬼達の足元から急に木が伸びて相手を束縛した・・・

「おいおい、こんな術見たことないで・・・」

「あ……兄貴、もしかしてこの方は大精霊の一柱じゃ？」

鬼達がざわめき、意味の分からない三人の術者は鬼達に説明を求めた。

「大精霊というのは遙か昔から存在するらしく、人間の姿をした八柱の精霊で全員が紅い髪と紅い眼をしていてバラバラの羽根の色をしているらしいです。昔から人の味方について我らの邪魔をするもだと伝承として親から聞きました。」

「その話が本当だとしても、こいつに羽根なんてないじゃないか」

縛られたまま鬼と人との話し合いを聞いていましたが、鬼達にも私の噂は広がっているんですね……なんだか有名人になった感じで身体がこそばゆいな……

捕まったまま呑気に口論しているのを止めさせるため私は紅い六枚羽根を展開した。

「はいはい……口論はそこまで」

「む……その特徴的な六枚羽根はやはり大精霊なのか。しかも紅色ときたか……」

「まあね。ぶっちゃけて言うと始祖精霊なんだけど、それは置いと

いて・・・私はいきなり攻撃を受けたんだけどその説明をしてもらおうか」

「我ら鬼はその術者に頼まれて攻撃しただけだ。そなたがああの大精霊だと知っていれば攻撃なんて馬鹿なこととはしなかった・・・」

「我らはそこにある大きな木である御神木・・・ほんとう蟠桃を守護する一族。この御神木がここら一帯を豊かにしていると昔から言われており、夜になると何故か物の怪達がこの御神木を狙って襲ってくるのだ。朝になり安心したところを急に現れたから反射的に退治しようとしたが、すまなかった・・・」

なんだよ・・・ただの勘違いで襲われただけか・・・それにしても紅い髪って漫画の世界では珍しいものだったかな・・・前世の世界じゃ黒・金・茶がほとんどだったけど漫画だと割とカラフルな頭をしていたと思うけど・・・

「いや・・・今回は私が突然現れたのが悪かったのだろう。しかし、ただあまり見ない紅い髪や目だからといってその特殊な力でいきなり襲うのは駄目だぞ。私がただの人間ならその鬼の一撃で死んでいるぞ」

「すみません・・・以後気をつけます」

「うるさ・・・ない・・・の？」

六体の鬼のうち一体の小さな鬼がこちらを怯えた目で見てくる・・・怯える姿の鬼つても可愛いのだがなんかシユール・・・それにしても鬼達の間で私の存在はどんな風に広まってるんだ？この様子から察するに、なまはげの様なものだろうか？いやいや・・・そんな筈はないよね。今の私はこんなにも美しいし、なまはげって確か鬼の類이었다し・・・むしろここにいる鬼がリアルなまはげじゃないか。

「別に殺さないよ・・・安心なさい」

「い、いや・・・私・・・良い子だから・・・良い子にしてるから・・・」

私が安心させようと思い満点の笑顔で言うと鬼の子供がさらに怯えた・・・  
あれ・・・この反応って私なまはげ確定じゃない？鬼からなまはげ扱いされる私の存在っていったい・・・

「悪い子はいね〜か〜」

「イイイイイヤヤヤヤヤ

私が面白半分で前世のなまはげの真似をすると小さな鬼は身体を縛る木をちぎりながら両手を上げて走り去り、消えた・・・周りの鬼や人たちは私を蔑むような眼で見てくる。あれ・・・なんか罪悪感が・・・そんな眼で私を見ないで！

「なんかすいません・・・」

私が頭を下げると鬼達は私の前から溶けるように消えた・・・おそらく子供を追ってここじゃない場所に帰ったのだろう。

私がショックに打ちひしがれていると術者が声をかけてきた・・・

「あの～それで何故このような場所にあなたの様な方がいるのですか？」

え～と・・・何故だったかな？

そうだ！たしか大きな霊地を回ってたんだ。衝撃的なことが多くて忘れてた・・・

「私は今大きな霊地・・・この御神木の様な不思議な場所を見て回っているのです。この木は膨大な魔力を内包しているため、物の怪達はその魔力の恩恵を得ようと襲ってくるのですしょう」

「魔力ですか・・・」

「そう。あなた達が使う気とは似て非なるもの。そしてこの世にある不思議な力の源・・・それがこの御神木にたくさん詰まっている。そこでお願いなんですけど、この御神木の枝を少し分けてもらえないかしら？」

「まあ先ほどのお詫びとして少しなら・・・」

「それでは枝をもらったら別の場所に行くのでまた縁があれば会いましょう」

私は魔法を解き術者を自由にすると枝をとるために浮かび上がった。そして木の中心に近いく私の胴周りより太い枝を選んだら、魔力のこめた手刀で切った。やった・・・こんだけ魔力のこもった枝なら色々なことに利用できるだろう。

(影さん、この大きな枝もよろしく)

私をお願いすると私よりも大きい枝は影に吞まれていった。

「驚いた・・・駄目元で試してみたがまさか収納できるとは・・・この影の倉庫はどれぐらいの容量があるのか想像もつかないな・・・」

「スオと別れてから一日半が経っているからそろそろ結論を出してはかな？」

「とりあえずお土産もできたし、旅の拠点として建てた自分の家に戻ろう。結論が出ればスオが私を訪ねてくるだろう・・・私はそう思い家に帰るため非物質化した・・・」

## 第九章 大きな樹（後書き）

枝を手に入れるためだけにこの話を書きましたが話の内容が薄いような気がします・・・

ですが早く魔法世界を造りたいのでこのまま投稿しました。

次回、魔法世界創造（予定）

陰陽術の呪文は修学旅行編の時の切り抜きとネットで調べたのものです。

2回目の登場あるのかな？

感想や意見、誤字脱字などありましたら報告お願いします。できればアンケートに答えてくれると嬉しいです

## 第十章 創造（前書き）

現在、将来のエヴァについてアンケート募集中

？ 幼女のまま

？ 大戦期まで大人に成長させる

数字だけでもいいので書いてくれると嬉しいです。

現在

？ 十三票

？ 二十二票

？と？を行ったり来たりするのは無効票とします。

たとえば普段は幼女ですが魔力供給を受けると大人になるとかは出来ません。

また原作期に入る前に封印されたとしても容姿は大戦期と変わりません。

## 第十楽章 創造

蟠桃の枝をもらってから2日ほど経ち、私は木で組み立てられた自分の家でのんびりしている。精霊だから食事や睡眠は基本的に必要ないので待ち続けるというのも暇だ・・・

暇なので外を眺めていると、ドドドという効果音が聞こえてきそうなほど全力で走ってこっちに来ているスオが眼に入ってきて・・・私に突進をかましてきた。

「ぐふっ！」

「良がっだ〜・・・お姉さま無事だったんですね！怪我とかないですか！？」

スオは顔を歪め涙を流しながら怪我がないか確かめるように私の体に抱きつきまさぐってきた・・・

え・・・何この展開？私はてっきりスオが思いつめた顔（ある意味これは一緒だが）で来て魔法世界についてのシリアスな話になると予想してたんですが・・・何故スオは私の心配をしているのでしょうか？

「ちょ・・・いきなりどうしたの！？私は今まで怪我なんてこ

とないですよ。ってどさくさに紛れて何処を触ってまひゃう・・・  
いい加減にしなさい!!」

まったく・・・スオは隙あらばこちらを狙ってくるので防ぐのが大  
変です。

「だ、だって・・・契約カードの図柄は変わってなかったけど、契  
約カードの念話が繋がらないからお姉さまの身に何かあったんじゃないか  
と・・・今まで繋がらないことなんてなかったから・・・」

たったそれだけでこの乱れよう・・・駄目だこいつ、早くなんとか  
しないと・・・

でもおかしいな、私はカードを持っているのに何で念話が繋がら  
なかったんだろう？

・・・あ・・・もしかして契約カードを影の中に入れてるからか？

(影さんカード出して)

「お姉さま・・・この気味の悪い黒い物体は何ですか？それに私と  
の契約カードを持っていますよ」

「これはね・・・私がスオを別れた後収納に便利な倉庫を作ろうと  
思って半日ほど呪文を唱えてたらできた影の倉庫なの。でも気を付  
けてね、この子喋れないけど自我があるから」

私が注意する前にスオは影の手によってアッパーを食らい吹き飛ばした……

「大丈夫？それにごめんね……多分この影の中に契約カードを入れてたから念話が繋がらなかったんだと思う。この影はどんな大きなものでも入る謎の空間になってるから……」

「いてて……お姉さまが無事ならそれで良かったです。でも自我のある魔法を作るなんて普通なら出来ませんよ。お姉さまの魔法がどんな原理で出来ているのか分ければ私の魔法の研究も進むのにこれだからお姉さまと一緒に居るのはやめられません……ふふふ」

ふふ脳震盪とかしてなくて良かった。

でも何故でしょう……最後の方はぶつぶつ言っていて聞こえませんでした。スオの方から寒気がします。まあ良くあることなので無視して話を進めましょう。

「スオ、念話で私に連絡を取ろうとしたということは結論が出たんですね？結論が出たならそれを私に聞かせて下さい」

私の言葉にスオは顔を伏せましたが、意を決したように話し始めた。

「私は3日間色々なことを考えました……私の願望、これからの魔法使い、幻想世界、お姉さまの話した事など色々合わせて考えました。そして考えに考え抜いた結果……お姉さまの願いであ

る火星に幻想空間を作ることになりました。幻想世界の崩壊？そんなの起こさないように今から対策を考えればいいんですよ！それにお姉さま言いましたよね、人間を信じろって。・・・だから信じます」

「ありがとう・・・本当にありがとう、スオ」

その後、私たちは体調を万全にするため今日は休み明日魔法世界を創造することにした・・・

皆様、おはようございます・・・

今日のために体調を万全にしようと考え早めに休むはずだったレイチエルです・・・

私の今の体調は精霊のくせに身体がだるいです。

私は精霊だが物質化する際、人間の体の構造を精確に模写している。

そのため、基本的には必要ないが睡眠や食事などをすることができ

・・・また、その他の機能ももちろんある・・・

そのことを知っているスオは昨日の夜私に襲い掛かり、あんなことやそんなことをしてきたから精神的に疲れている・・・忘れてるかもしれないが私は元は男だったし。精霊とは元々実体がなく精神体であるから精神の疲れがそのまま物質化している肉体に影響を及ぼ

して身体がだるいのだ・・・

「お姉さま〜おはようございます!」

私の体調が悪い代わりにスオは絶好調の様だ・・・それに肌がツルツル光っているように見える。

「おはよう・・・」

「お姉さまが元気なのは珍しいですね。今日は記念すべき日になるのでから張り切って行きましょう!」

どうやら昨夜の出来事のせいでスオのテンションがおかしいようだ・・・

まあプラスに働いているから良しとしますが、人間ポジティブに考えないと。私は精霊ですけどね・・・

「とりあえず移動しましょう。人がおらず転移魔法にも耐えられるほどの大きな霊地はすでに見つけてありますから」

「いやあん、お姉さまが私を人のいないところに連れ込もうとしてる〜でも・・・」

「アーティファクト出してください」

相変わらずスオのテンションはおかしい。私はスオのアーティファクトを受け取り、このままでは不安なので頭を冷やさせることにした……

「氷の精霊よ 我が名のもとに集い 卑しき者を 芸術に」

『氷像』

呪文を唱えるとそこには、眼を閉じ自らの体を抱き体をくねらせている氷のアートがあった……詠唱は適当でしたがイメージ通りに出来たようだ。見た目はあれだが、これでも中の人は無事でありただ意識がなくなり身体が動かないだけの拘束呪文という訳だ。

「これで少しは頭が冷えてくれるといいのだが」

『リロケート』

本当にスオのアーティファクトは便利！一度行ったことがありきちんとイメージできれば転移できるのだから。

早速この地に転移魔法陣を刻んでいきますか。

「ただいま転移魔法陣を書いています」

「この氷の像邪魔だな」

「ただいま転移魔法陣を霊地と接続中」

ふう、やっと転移魔法陣を書き終わった。地味な作業な分疲れな  
・  
・  
とりあえず次はスオを元に戻しますか。

「火の精霊よ　そこにある氷のみを溶かしてくれ」

私が火の精霊に頼むと氷を覆う様に火柱が経ち一瞬で氷が溶けた。  
スオは大丈夫かって？燃やす物の選択なんて私なら簡単だよ、お願  
いするだけだもん。

「でもお姉さまが望むなら昼からd・・・って何これ！火！？つ熱  
！・・・くはないな・・・」

「頭はすつきりしたかい？」

「はい・・・どうやら恥ずかしい姿を見せてしまってますいません」

スオのテンションが元に戻っていて一安心つと。

(影ちゃん例の物出して)

私は影から湯呑を受け取りスオに渡した。

「これ飲んで。身体が温まるよ」

「あ、ありがとうございます・・・苦いです。何を入れたんですか？」

「ん？私が魔力を込めた水に膨大な魔力を内包している木枝の粉末」

「ブツ！ゲホツゲホ・・・何てものを飲ませるんですか！」

「まあまあそう言わずに。これで一時的にいつも以上の魔力が出せるはずだよ(多分)」

これでスオの魔力については万全と言えるだろう。朝起きた時スオを見たときはほんと焦った・・・なぜならテンションは高くせに魔力量はいつもより減っていたのだから。まあそれは昨日の夜あんなだけしたのだから仕方がないのだけれども・・・

そんなことから私は、まだ試作品である蟠桃の枝から作った魔力活性剤をスオに飲ませたのだ。これで魔力も回復し検証データもとれるから一石二鳥だ。副作用がなければいいけど・・・

「スオの準備も出来たから私も火星に転移するための準備をしますか」

「風の精霊よ レイチェルの名のもとに集い 我が意に従え」

『風牢結界』

これはどこかを中心とした半径十メートルほどの空気を支配することが出来る魔法。これによって、酸素を確保しつつ私の周囲の気温を一定にすることが可能だ。火星には精霊がないから地球で使っていないと向こうに転移した瞬間スオが窒息死してしまう。

本来の使い方は相手の半径十メートルを支配して一瞬で気絶させる様に使うものだ。

「お姉さま、ここら辺一帯に認識阻害の魔法をかけ終わりました」

忘れてた・・・この転移魔法陣は転移するとき大きな光を発するんだった・・・

「ありがとう。すべての準備が終わったから火星に転移するよ」

スオが頷いたので私たちは火星に向かって転移した・・・

「ここが・・・この赤い大地が火星・・・お姉さまの言うとおりの力が少ない」

私たちの前には地球の半分ほどの面積である赤い大地が広がっている。

面積は半分だが大気中の魔力量は比較できないほど少ない・・・

「早く始めよう。この空間の酸素がなくなる前に地球に戻らないと・・・」

「はい・・・始めます。アデアット」

魔法世界を火星に誕生させるためにはスオのアーティファクトである造物主の掟を使う。

造物主の掟の能力にはリロケート以外にもあり、たった一度しか使えないがそれは造物主の名前にふさわしいものだった。スオは造物主の掟を水平に掲げ一度限りの詠唱を始め、同時に複雑で巨大な魔法陣が展開される・・・

『造物主の掟よ 我 始祖精霊レイチエル・フォン・オルタードの契約者なり 契約者の血をもって能力を開放する 世界を造りし能力よ 今此処に顕現せよ』

スオの詠唱が終わると同時に火星の大地に花びらのようなものが舞い、瞬く間に大地を塗り替え世界を創造していく・・・新たな大地と空気と水と木など、魔力や生物以外のものがどんどん創造される。ついに花びらが火星全体を覆い、位相をずらす事によって火星に重なるような新たな大地の創造が終わった・・・

しかし・・・

新たな世界から眼を外し、スオを見てみると頭を押さえ倒れていた・・・

「おい！大丈夫か？しつかりしろ！」

「あ、頭が割れそうなほど痛いですが、だ・・・大丈夫です。ただ詠唱が終わると同時になんだかよく分からない知識が頭の中に入ってきた様な気がします・・・」

よく分からない知識？まさかあれか・・・？原作まで生きていたし何千年と生きる方法とか？それともまた別の知識なのか・・・これは後で確認しないといけないね。

「おめでとう、スオ！あとはこの魔法世界の魔力が十分に溜まり、その後安定するのを待つだけ・・・安定すれば魔法使いたちを移住させて本当の魔法世界の誕生だ。・・・とりあえず今は戻ろう」

「・・・はい」

『リロケート』

転移魔法が発動するということは、スオは造物主の掟の力で魔法世界と地球を行き来できるのか・・・

ちなみにこれは私が造物主の掟の力を借りても出来ないことだ。造物主の掟を使った転移『リロケート』は触れていれば誰にでも使えるようになってきているが、本来の持ち主とその他では転移できる距離が違うらしい。スオが使えばどんなに遠くてもイメージできれば転移可能だが、その他では有効範囲から出ると転移が発動しないのだ・

でなければ最初から転移魔法陣で火星まで飛ぶのではなくて、私が『リロケート』を使ってスオを火星まで連れて行っている。だが私が幾らやっても転移が発動しなかったのだ・・・

「ふう、地球に戻ってこれた」

「やっと・・・数年間の辛抱が必要だけどやっと魔法使いたちが住む世界ができた・・・」

「スオのおかげで私が長年想っていたことが出来た。ありがとう」

「いえ、これは私とお姉さまの思いが同じだったから出来たんです  
「よ」

ほんと、一年前スオが私に話しかけてこなかったら原作通りの魔法

世界は出来ていなかったかもしれない。

「今までありがとう、スオ。お前との一年楽しかったぞ」

「えっ？どういうことですか・・・」

「私はまた世界を回る旅に出る。この一年働きっぱなしだっただろう、だからスオは少し休め。そうだなあ普通に生きて、普通に恋して、普通子供を産んで、たまに魔法を使って人助けをする・・・こんな生活も悪くないと思うぞ」

「私は邪魔ということですか・・・」

「違うよ。私達は主と従者であり、また掛け替えのない親友だ。決して邪魔なんて思わない！だから私はスオに人としての幸せを味わって欲しいんだ・・・それに離れるといっても私達には念話があつていつでも話せるし、私も偶には顔を見に飛んでくるよ。」

「お姉さま・・・お姉さまがそこまで言うてくださるのなら私は付いていきます。ですが毎日念話しますのでちゃんと出て下さいね」

私達は無言でじっと見つめ合う・・・そして・・・

「じゃあ私はそろそろ悪人退治の旅に出るよ。月に一度くらいでこちら辺に飛んで帰ってくるから」

「気を付けて・・・」

私は別れの言葉を言うと、振り返らずにその場を去った・・・

「親友と言ってくれて嬉しかったですよ、お姉さま」

## 第十章 創造（後書き）

最後はちょっと強引でした。こうでもしないと・・・

レイチエルの詠唱のところで我が名のところがレイチエルに変更したのは

魔法の制御が難しいのはレイチエルに変化するって感じですよ。

これが今年最後の投稿になります。

次話は年が明けてからですな・・・少し遅くなるかもしれませんが

では少し早いですが、良いお年を！ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0023z/>

---

ネギまに生まれた始祖精霊

2011年12月29日00時38分発行